



加茂みどり (Midori Kamo)

大阪ガス(株) エネルギー・文化研究所 主席研究員



篠田 美紀 (Miki Shinoda)

大阪市立大学大学院  
生活科学研究科准教授



中嶋 節子 (Setsuko Nakajima)

京都大学大学院  
人間・環境学研究科准教授

# 子育てを通して考える、 家族のつながりの今・未来

今回は、専門の分野において「家族」に関心を寄せつつ、自身も子育て期にある女性研究者をお招きし、それぞれの体験をもとにしながら、家族や周囲の人たちとのつながりの形のあれこれについて語り合っていたいただいた。大きく変容しつつある現代の家族の実態や社会との関係性について語り、ともに考えながら、ネットワーク型の社会についても展望していただくこととなった。

子育てから実感する  
家族のつながり



加茂 今回のテーマは、主に子育てを通して家族のつながりを考えるというものです。私から自己紹介をさせていただきますと、大阪ガスの実験集合住宅NEXT21での居住実験を担当し、また京都の都心にある祇園祭の鉦町に住んでいることもあって、鉦町における都市の暮らしの変化などにも関心を持っています。住宅というのは家族を入れる容れ物とも言われていますが、従来の、集合住宅における家族のモデルであった核家族が崩壊しつつあると

言われてから久しく、家族にモデルを求めること自体に無理があるのかなとも感じています。

それでは、本題に入る前に、まず、おふたりの現在のご研究のテーマについてお話しただければと思います。

**篠田** 私は臨床心理学の立場から、これまででは不登校の子どもやその保護者の方と個人面接をすることが多かったのですが、最近は高齢者のサポートが主な研究テーマになっていきます。高齢期の家族となると、配偶者の方を見取られて、ひとり暮らしとなっている方も多いのですが、他の世代とのかかわり合いなどを含めて課題が多い。今は、これからの少子高齢社会がどうなっていくのだろうかということが大きな関心事ですね。

**中嶋** 私は、建築と都市の歴史が専門です。主に近代を研究対象にしています。これまで、都市の変容、郊外化のメカニズムを、土地利用や建築などハード面を中心に研究してきましたが、都市の形、住まいの形は、そこで練り広げられる生活、そしてその主体である家族のあり様と深く関わっています。家族から都市や建築を考える重要性を感じています。最近では、歴史的な町並みが残る地域で、観光ではなく生活の質という視点からまちづくりを進める活動に多く関わっていて、家族と地域について考える機会も増えてきました。

**加茂** まず、自分の子育ての現状ということでは、私の子どもは2人で、上が小学校1年生の男の子で下が3歳の女の子です。ずっと保育園に預けて共働きをしました。上の子は今春から小学校に入りましたが、学童保育で夜8時頃まで預かってもらえるとということで、今は小学校から学童保育のところまで、何とかひとりで歩いて通ってくれていて、ほっとしています。

**中嶋** 私のところは、小学校2年生の男の子。周りからは、「いったい誰が育てているの?」とほんとによく言われます(笑)。私は育児休暇をとらなかつたので、母が田舎から出てきて私が住んでいた大阪にマンションを借り、生まれた直後から息子をみてくれました。そのうえ、子どもが1歳になってすぐに、当時在職していた大阪市大から在

外研究員として1年間ニューヨークに行かせていただいたのですが、このとき最初の3カ月間は子どもを実家に預け、その後、主人が半年間の育児休暇をとって、アメリカに連れてきました。帰国後は母のところにもまた預けて、保育園の間は私と主人が週末ごとに田舎に帰っていました。でも、さすがに小学校に行く時期になると、母に「連れていきなさい」と。その頃は、私は勤め先を移って京都にいて、主人の方は大阪。今は子どもと私が京都で、主人が大阪という状態です。ほんとに一家離散状態で、かなり評判の悪い家族なんです(笑)。

**加茂** 面白い家族の関係ですね。篠田先生はいかがですか。

**篠田** 私のところは、上が中学校1年生の女の子で、下が小学校1年生の男の子の6年違いです。保育所は公立で上の子の時は迎えが6時でした。下の子になってようやく6時半。小学校になって学童保育は7時まで。うちは両方とも地方出身なので、祖父母たちは時々大阪に来て助けてくれますが、頻繁には望めない状況です。職場が近いので5分前に出て自転車でダッシュして滑り込む。何よりよかったのは、父母会がある保育所だったこと。お母さんたちとママ友になって、すごく助かったんです。「〇月〇日お迎えお願いできる? 8時には帰ってくるから」と頼み事をすることも。子どもの方も、ちよつと大きくなってくると「今日は、私、この家やねん」と結構喜んで(笑)。その家でご飯を食べ、場合によってはお風呂に入れてもらったりもする。何かの時には相互扶助。うちの場合は公的サービスより、つながりを通してやってきました。

**加茂** 近いところでうまくネットワークを利用されているんですね。

**中嶋** 週末は大体お父さんが子どもをみてくれています。その代わり、私が研究会とか学会とかでいなくなったりもする。それでも、お互い無理な時もあるので、予めメールとかで打ち合わせをします。

**加茂** 私のところも、毎週末には翌週の当番を相談しています。夫と話して「この日、私はだめ」「僕もだめ」。ほとんどせめぎ合い。どうしてもだめな時は、どっちかが仕事を諦めないと仕方がない。

**中嶋** 私は、どうしてもその時は、母に来てもらったりもしています。ただ、それも無理なときは、市のファミリーサポート制度なども利用しています。

**篠田** うちは、夫も大学教員で裁量労働制の勤務なので、実験をしながら比較的自由に動いてくれる。お迎えも交替です。学童保育でも「さつきお父さんが来て、もう連れて行きましたよ」ということがよくあります。両方が動けるといって点では楽ですね。

**加茂** 私も、夫が大学の教員だからシエアでできていると思います。私と同じサラリーマンだったら難しかったかもしれないですね。私は1人目を産んだ時、「育児休暇を3年とります」と言って休んだんです。その終わり頃に2人目の妊娠がわかったので、休暇を延長させてもらい、結局3年数カ月休暇をとった。それも男性だったら難しいですね。

**中嶋** 私は、週末は夫にみてもらう代わりに、ウィークデイはこちらでなんとかやり繰りしています。仕事で抜けられないことは当然あるので、そのときは、割り切って人に預けます。同じマンシヨンの方とか知り合いの先生とか、よく行く飲み屋のおやしさんに「水曜日あいていますか？」とか(笑)。よく「○○さんという方が迎えに行きますから」と学童クラブに連絡しています。個人的なネットワークですね。

## 個人化していく

## 家族と周囲の人のつながり



**篠田** 家族がいくら仲良しで、そのつながりを強化したとしても、周囲の人との関係がないと、やっぱり泥沼に入ることがありますね。キャンプとかに行っても、家族同士だと、「いい加減にしろ!」という感じになることがよくあります。ところが大勢で行くと逃げ場がある。子どもは親に怒られても、よそのお父ちゃんと遊んでいたりするわけで

す。家族だけで絆を深める時間もいいですが、広がりのある、複層的なつながりの方が、子どもにとっても安心できるのでは。

**加茂** 直の関係でなくて、ちょっと違う人がいることが大事ですね。

**篠田** おじさん、おばさんは斜めに見る人だから、空気を抜いてくれる。あのおばちゃんだと大丈夫ということがあって、そういう関係があるのが大切。短期間でも周辺にいろんな人がいて、そういう関係があるのが大切。

**中嶋** 近代家族的な友愛家族神話は、もう崩れていますよね。でも、まだそのイメージの残像があって、それに結構縛られている。うちは個人化が先鋭的に出ている家族ですけど、個々がどう責任を持って家族を構成していくかということに、それなりに自覚的でありたいと思っています。家族を構成する力学がどう働いているのかというと、私のところは、まだ子どもが小さいので、今は子ども。では次はどうなるのか。近代家族だと、夫婦がいて子どもが2人いてという、理想的で幸せな家族像があった。それが金銭ではなく、愛情だけでもなくということ、個々が責任を持つような関係になってくるとどうなるのか。子どもを産む、産まないも選択肢のひとつになってくる。

**加茂** 家族は何によって成り立っているのかということですね。実際には家族が個人化していくという感じが今は強くなってきているように感じます。

**中嶋** 今までは、家族が子どもの面倒をみる、家族が責任を負うということだったのが、今度は自分がどう責任を負うかになる。生活のリスク管理自体も、家族の形が変わってくると違ってくるでしょう。公的サービスに頼るのか、個人のネットワークで対応していくのか。家族の形を、もう一度構成し直し、その中で個人がリスクを引き受けていくというふうになってくる。それに対する社会制度設計が最近では進められています。個人にとってのリスクヘッジをどう確保していくのかなど課題が多い。

**篠田** 社会的にも、国の制度としても、もっと充実させていかないといけない。制度的にもまだまだですよ。

**中嶋** 男性に育児休暇をとれとか、そういうことだけでなく、それぞれが、家族にどう責任をとるのかで形が違ってくるでしょうね。その意味では、男性がお金を稼いでくるから子どもは奥さんがみんさいというのも当然ひとつの形。ただ、どんな選択をしても不公平にならないことが重要だと思います。

**加茂** ほんとにそうですね。特に女性が肩身の狭い思いをしないようにならないと。たくさんさんのことを抱え込みすぎたら身動きがとれなくなる。

**中嶋** 近代家族神話は依然として社会に残っています。3歳までは母親の手でとかいうのも、私にしても何となく気にはなる。でもこれからは、そういうことを感じない世代が出てくるでしょうし、不平等を感じない世の中の仕組みが広がっていくべきだろうと思います。

## 家族の多様なあり方と ネットワーク型社会



**中嶋** うちの場合は、子どもにも「世の中には、いろいろな家があるから大丈夫だよ!」と言っている(笑)。世のお母さん方は、皆一生懸命育てなきゃと、頑張りすぎかも。もちろん私もそう思ってるんですけどね。

**加茂** ある方が「家族の関係は薄める必要がある」とおっしゃったのが印象に残っています。家族だけでガチッとやると、逃げ場がない。

**篠田** 介護を背負って限界まで来ている人たちを見たりすると、私の場合、自分ひとりだけでは根本的に無理だと思えますね。子育てにしても、介護にしても、もちろんかかわるし、放棄することはないし、



やれるところまではやるけれど、そこではいろんな人とタッグを組みながら向き合いたい。

**加茂** ネットワーク型の子育てから、今度は介護までということですよ。

**篠田** 家族という関係の歴史の中では、実は子育て期間以外の方が長い。その意味で、子育て期の後は、どこに基準をおいて家族と呼ぶのか。それぞれに家族のあり方は違ってくるでしょうね。

**中嶋** ある意味で、家族というのは期間限定のものと言えそうですね。その時に必要な関係、個人的なつながりで、ある時期をともに過ごす。

**加茂** 家族社会学の分野でも、「拘束要因」としての家族から、個人の選択を助ける「支援要因」としての家族に変化していると言われていますね。

**中嶋** 選択肢がないのが子育てと介護で、そこにはかわらざるをえない。

**篠田** この前、学童で一緒に子育てしているお母さんに、「一緒に子育てやってきたんだから、一緒にデイクアセンターにも行こうよ!」と誘われました(笑)。先が長い。

**加茂** 逆に私は、ファミリーの期間は短いから、子どもができた時に、存分に子育てを楽しみなさいとも言われました。

**篠田** 「20年のお客さま」と言いますね。最近「15年」かも。まさに選択的期間を、どう家族するか。

**加茂** おふたりの話を聞いていて感じたのは、ネットワーク構築の能力というのが、生存能力のひとつとして大きいということですね。

**中嶋** それはそう。特に女性がこれだけおしゃべりで社交的なのは、ネットワークをつくる能力だと思います(笑)。ひとりの老後を生きる

女性が多くなるけれど、その時にどういう人間関係を持っているのかはかなり大きな要素。

**加茂** ネットワーク構築能力があるかどうか、子育てにおいてもその後においても大きく影響する。

**中嶋** それをできない人も、すくいあげるような制度が必要ですね。年金制度でも夫婦で個別になっていきますよね。ただ、今まで標準家族で主婦をやってきた人にとっては、それはリスクな制度になっていく面もある。それもきちんとフォローしていかなければならないでしょう。

**篠田** 今までは、「何々家」とか「我が家」とかのファミリーアイデンティティを基盤として支えあっていたのが、これからは個人が、ある程度しっかりと基盤を持って立ち上がらないといけない。群れることを否定するのではないけれど、個人があつて家族があるという捉え方に変化してきているのでしょね。

**中嶋** 群れるのも家族でなくていい。補完するネットワークがあればいいという話ですね。

**篠田** シングルで頑張っていこうという人でも、これからは自分が引き受けていくネットワークというものが必要になってくる。

**中嶋** 女性が家事労働を外注できるようになったし、外に出て働くようにもなった。その一方で、今度は若い男性の中で、「男がなぜ家族のために給料を運んでいかないとイケないのか」と考える人も増えてきているようです。さらには、「自分の給料を誰かに使われるのは嫌だから結婚しない」とも。それもひとつの権利の主張。そういう世代が育っていくと、それでも「一緒に暮らしましょう」というのはどういう意味をもつのか。特に子育てということになると、どう選択していくことになるのか興味深いですね。

**加茂** 男性にとつて最も辛いのが、毎月必ずお金を家に運ばなければならぬという義務。それを放棄するというのは一番自然な発想だという指摘もありますね。でもそうしたらどんな家族の形になるのでしょうか。

## 一様でない

## ライフサイクルと家族の形



**加茂** 家族を再構築していく力学のひとつの要因が、子どもだというのは確実にあって、やがてそこから抜けた時に、自分はどのような選択をするのかと考えますね。

**中嶋** 私は結構楽しみです。「どうしようかな?どこに住もうかな?」と。子どもがいると、あまり引越すするのはどうかと考えちゃいますけど。

**篠田** そう考えたとき、また一からネットワークをつくらないといけないのかと思うと、私は少し面倒。それだけネットワークに支えられている。

**加茂** 今日の話聞いてきて、自分はネットワークを活用していないなと思いました。夫とふたりで完結している。実はかなり無理がある時もあるんですが。

**中嶋** 私の場合、無理なときは、「どうしようか」と一生懸命考えます。

子どもを人に預けることに躊躇していると先に進まないし、続かない。**加茂** 私の方は預けてもいいんですけど、夫が「じゃあ、僕が休む」となる。それで結果として完結しているんです。京都人的なのかもしれないですが、ネットワーク型と言うとき、あまり甘えるのはよくないのではという気がどこかにある。

**篠田** そうですね。ネットワーク化と言いながらも、他方では、若い世代のお母さん方の中には、「どうしてそういうかわかりを持たないといけないんですか?」という人たちも確かに増えています。ママ友をつくる機会が難しくなっていくようにも思いますね。

**加茂** 私は羨ましいなと思って聞いていました。他の人がネットワークで協力されていても、自分は同じ役割を担えないのがわかってるのでやはり心苦しい。

**篠田** 私は、上の子どもの時に育児休業を1年とったんです。でもそ



篠田美紀 (しのだ・みき)

大阪市立大学大学院 生活科学研究科准教授

大阪市立大学大学院生活科学研究科後期博士課程中途退学。専門分野は臨床心理学。主な研究テーマは心理的な生涯発達。最近は、回想法などの実践研究を通じて高齢期のころについての研究を進めている。博士(学術)、臨床心理士。著書に、『保育・教育に生きる臨床心理学』(共著、光生館)、『ライフサイクルの心理療法』(共著、創元社)ほか。

中嶋節子 (なかじま・せつこ)

京都大学大学院 人間・環境学研究科准教授

京都大学工学部建築学科卒業。同大学大学院工学研究科建築学専攻博士課程修了。日本建築史・都市史専攻。近代日本の都市環境(市街地・住宅地・緑地)が主な研究テーマ。歴史的建造物および町並みの保存にも関わる。博士(工学)、一級建築士。著書に、『シリーズ都市・建築・歴史7 近代とは何か』(共著、東京大学出版会)、『近代日本の郊外住宅地』(共著、鹿島出版会)ほか。

加茂みどり (かも・みどり)

大阪ガス(株)エネルギー・文化研究所 主席研究員

京都大学大学院工学研究科建築学専攻博士課程修了。研究分野は住宅・住環境・コミュニティ。少子高齢化に対応した住宅や、京都都心部の地域コミュニティ等について研究。実験集合住宅NEXT21での居住実験を担当。博士(工学)、一級建築士。著書に、『住宅の近未来像』(共著、学芸出版社)、『都心・まちなか・郊外の共生—京阪神大都市圏の将来』(共著、晃洋書房)ほか。

の時は仕事をしていながら地域のお友だちがいなかった。寂しくて、毎日、夫が帰ってくるのを待っていました。上の子が保育所に入った頃から仲間ができたんです。一緒に旅行をしたり、休日に遊びに行ったりして、そのつながりは今でも大切。中には20代のお父さんもいます。仕事の上では出会うことがなかった人たちとのつきあいが楽しいですね。

中嶋 私も、子どもにとっては、周りにいろんな人がいた方がいいことなんじゃないかなと、勝手に思っています。「自分はいろんな人から大事にされている」と。おじいちゃん、おばあちゃんがいて、近所のおじちゃん、おばちゃんもいて、わけのわからないおじさん、おばさんがいる。実際、大学の教員はいろんな意味で変わった人が多いです。

篠田 自身はシングルだったり、結婚して夫婦2人という方も含め、子どもにとって面白そうな人が側にいるというかわり合ひも、とても意味があると思いますね。

中嶋 イメージは北杜夫の『ぼくのおじさん』とジャック・タチの『ぼくの伯父さん』。ちょっと変わった親戚のおじさんのような人。子ども

もは世の中を一つの形ではなく、いろんな方面から理解する。多様性というか、人間はいろいろだ、という中で、自分というのが確かめられていくのではと思っています。

加茂 おふたりともお子さんを一生懸命育てていますよね。できる範囲以上のことは無理だけれど、いろいろな形を見せている。子育て期のネットワークというのは、子どもが育つときに、ある時期めぐりあう大切な関係性だと考えられますね。

中嶋 人のライフサイクルの中で、そうした、かわりのある人たちの形も次第に変わっていくのでしょうか。

篠田 平均寿命も長くなっているし、今は高齢で産んでいる人も多いので、世代の重なり方でも見ても昔の家族像とは大分違ってきている。ライフサイクルのあり方も一様ではないということですね。

加茂 そういう意味で、ネットワークのあり方にも多様性が生まれている。ひとつの価値観に縛られることはないということですね。今日は楽しくお話をうかがいました。ありがとうございました。

CEL



特集 つながりの原点 “家族”を問う

Family ties : how they relate to personal lives and society

## Ⅱ 家族のつながりの多様なあり方

- 日本の家族を襲う危機と  
それへの免疫を鍛えつつあるアメリカ家族 ..... 越智 道雄
- 西アフリカ・マリの家族の形が物語るもの  
—家族のあり方を支える住居の形態 ..... ウスビ・サコ
- 中国型「家族ケアシステム」のゆくえ  
—チャナ イン ワンダーランド ..... 宮坂 靖子
- フランス女性と労働 ..... 中島 さおり
- 個を尊重するデンマークの家族形態 ..... 高田ケラー有子
- 日本映画における家族の肖像 ..... 田中 英司
- 家族の多様化と家族法 ..... 二宮 周平
- ネットワークとしての現代家族 ..... 山根 真理
- 「ひとりの社会」における新しい家族のかたち ..... 松原 惇子
- ワーク・ライフ・バランスと新しい家族像 ..... 丸尾 直美
- テレビドラマの脚本と「家族」への思い ..... 田淵 久美子
- パラサイトシングルと家族の現在 ..... 山田 昌弘